



巻 頭 言

求むジェネラリスト

金 原 繁*

応用物理学の関係者と話をしていると、とくに工学畑のスペシャリストと呼んでよい人達から“創造”とか“クリエイティブ”とかいう言葉が頻繁にでてくる。理学畑の人達からはあまり聞かないような気がするのものはものを作っていない人達が多いせいかもしれない。応用物理学会の講演会に出ていると、講演数の多さ、討論の活発さに大いに感銘をうけるが、手放しでこの状態を喜んでばかりはいられないような気もする。よく聞いてみると、講演者は、工学系のスペシャリストが多く、簡単にいえば、プライオリティーの主張に講演会の場を使い、同じスペシャリストの質問者は情報の収集に参加しているのではないかと思えることがある。したがって議論の中に、ノウハウをいかにわからなく話すか、いかにうまく他人から価値ある情報を引き出すかというタクティクスが存在し、物理法則を討論のうちから捜し出そうという心意気はあまりない。創造活動を通して新しい一つのデバイスを作り出すことは大いに結構なことだが、個々のデバイス製作に夢中になって、自然法則の追求や学問の体系化には関心を示さないのでは、科学者の集団であるべき応用物理学会として片手落ちである。

われわれは、エジソンとニュートン、マクスウェルのどちらからより多くの恩恵を受けているだろうか。ものすごく多くの発明をしたエジソンがわれわれに大きな利益を与えてくれたことはたしかである。しかし彼のやり方、考え方を他人に伝え、教育することはむずかしい。彼の業績は発明品というものでしかなく、いずれは消えるといっちはいいすぎだろうか。

ニュートン、マクスウェルの業績は前世紀から連綿として教え続けられ、世界中で数しれない科学技術者の基本的な教養になっている。それは、かれらがジェネラリストであり、多くのデータを整理し体系化を行ったからである。応用物理学会はただ個々の結果を断片的に発表するだけの場ではないと思う。創造は確かに大事だが、応用物理学を一つの体系ある学問に発展させるためには、整理しまとめるという活動も忘れてはならない。そのためにジェネラリストの出現が待望される。いまのままではわが学会は応用雑学会になりかねない。応用物理関係の専門書ひとつをとっても、ほとんどが編著者と分担者による合作である。日本はまだよいほうで外国の本で、一人の著者による専門書を探すことはもはや不可能にちかい。現代は技術の隆盛期であるとともに大学者不在の学問の衰退期にさしかかっているという実感をもつ。

* 東京大学工学部物理工学科 〒113 東京都文京区本郷 7-3-1